

拓殖大学大学院 言語教育研究科
言語教育学専攻 博士論文

要旨

「テイル」の用法に関する研究

－「状態」と「立証のための情報提示」の用法を中心に－

曹 倩

指導教授：石川 守 教授

2015年12月

概 要

本論文は、日本語学習者にとって最も習得困難な学習項目の一つである「テイル」の用法について論じたものである。「テイル」は、初級の早い段階から習い始めるにもかかわらず、学習者は上級になっても、多くの間違いを犯してしまう。この「テイル」は、これまで多くの研究者により研究されてきたが、まだ多くの点で未解明の問題が残されている。これまでに、「テイル」の分類についての研究は盛んに行われてきたが、まだ十分に分析されていない用法がある。主な問題点は次の2点に絞ることができる。

一つは、「状態」の「テイル」であるが、従来の研究では、「単なる状態」と「結果残存」のように、二つに分けているが、筆者はこの二種とも「状態」に分類すべきだと考えている。この問題を解決するには、「テイル」の「状態」の用法の特徴を明らかにし、どのような動詞に「テイル」をつけると、「状態」となるのか、より妥当な動詞の分類をする必要がある。

もう一つは、今までの先行研究で、いわゆる「経験」と分類されてきた用法である。この用法に関しては、「経験」、「記録」、「過去の事実の回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」などといった解釈がなされてきたが、これもまだ説明しきれない部分である。

なお、「テイル」の用法は多岐にわたるが、それを全体的に整理した研究は、管見ではあるが、まだないような気がする。本論文では、この「テイル」の全用法を整理し、また、今述べた未解決の問題を明らかにし、言語教育上の一助とすることを目指している。

第1章はじめに

第1章では、本論文の背景と目的、研究方法、論文の概要について論じた。

第2章 先行研究

第2章では、「テイル」構文について、金田一春彦とそれ以降、現在に至るまでの藤井正、高橋太郎、吉川武時、寺村秀夫、工藤真由美、庵功雄など主な研究者ごとに、「テイル」の分類に重点を置いてそれらの研究をまとめた。

第3章 「テイル」構文の用法に関する分類

第3章では、第2章の先行研究に基づき、自分なりに「テイル」について、分類を以下のように行った。

1 「進行中の（動作・変化などの）動き」

今、テレビを見ている。

- 2 「状態」
- 単純状態：この道は曲がっている。
 - 結果の状態：雪が積もっている。

3 「繰り返し・習慣」

私は毎日朝ドラを録画している。

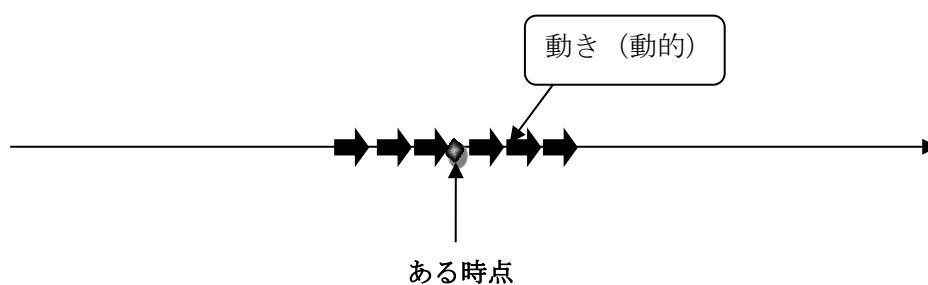
4 「長時間の継続・持続」

日曜日は朝から晩まで掃除をしていた。

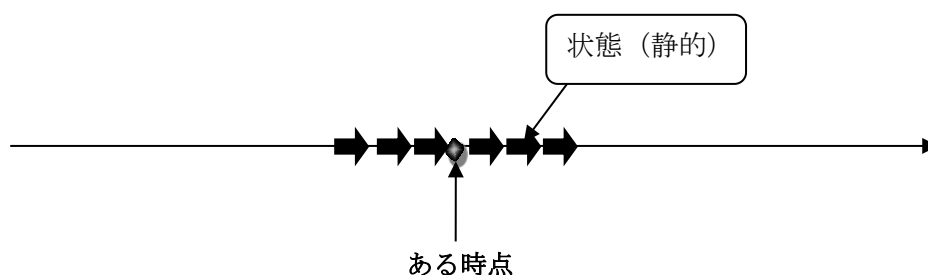
5 「立証のための情報提示」

あの人はたくさんの小説を書いている。

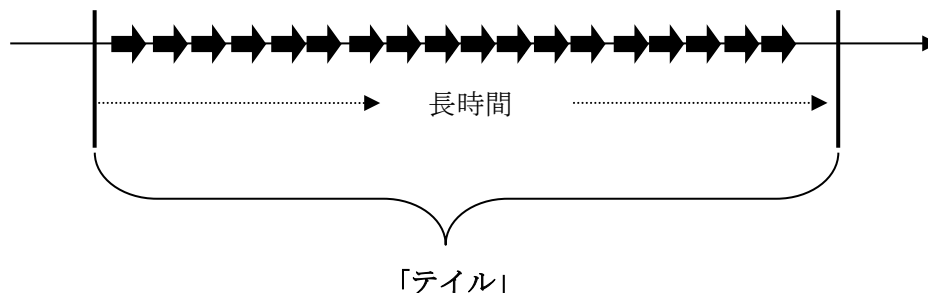
1の「進行中の（動作・変化などの）動き」という用法では、ある時点で、動作や変化などの動きが丁度起こっている最中で、継続していることを表すものであり、この用法が「テイル」の基本的な特徴である「継続性」が最も良く表れている用法であるという結論を得、以下のような図式を示した。



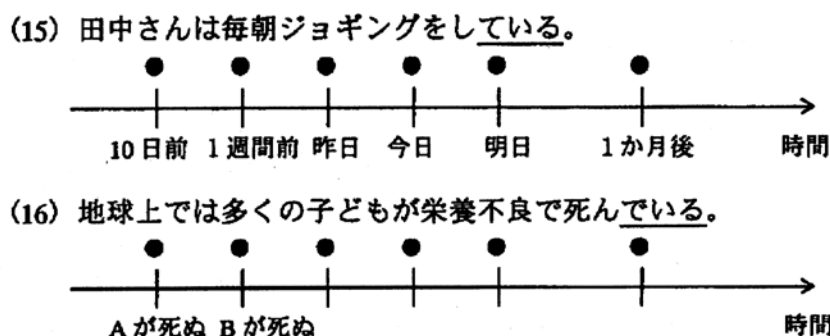
2の「状態」の「テイル」の用法では、従来の研究では、明らかになってこなかった動詞との関係に問題があるということを指摘し、図式を以下のように示し、細かい分析は第4章で行った。



3の「長時間の継続・持続」の用法は、先行研究ではほとんど取り扱われてこなかった用法で、新たに提起した用法である。この用法は、「朝から晩まで」や「一日中」、「一晩中」、「一年中」などのような「長時間」を示すものが文脈上存在する場合に用いられる。焦点はその時間の長さにある。図式で示すと、以下のようになる。



4の「繰り返し・習慣」の用法では、同一の主体によって、同じことが何度も反復して行われる行為を指す場合と、複数の主体によって繰り返し行われる動作を指す場合がある。これに関しては庵（2001）の下記の図式で示した。

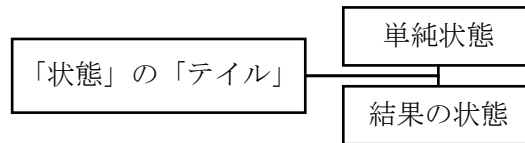


5の「経験」、「記録」、「過去の事実を回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」については、従来「経験」という用法で論じられてきたが、このように様々な見解があるため、ここでは、例文のみを提示し、詳しくは第5章で分析することにした。

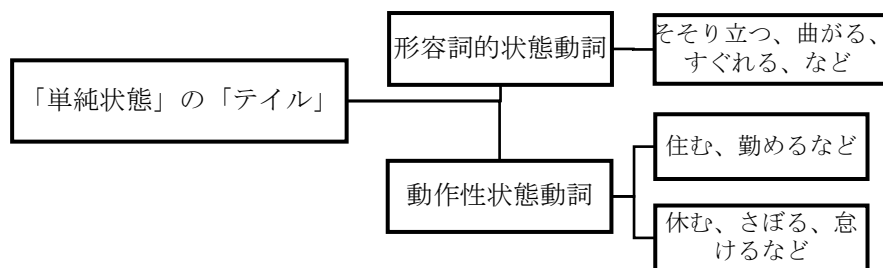
第4章 「テイル」構文の「状態」の用法について

第4章では、2番の「状態」に関する「テイル」の用法に関して、詳しく分析を行った。

この用法に関しては、先行研究で述べられてきた「単純状態」と「結果残存」には、共通した部分があるということがわかった。それは、発話時点から見て、両方の用法が表しているものは、すべて動作性がなく、状態性を表しているということである。その結果から、それらを「状態」の「テイル」として、一つにまとめ、次のような図式に示した。

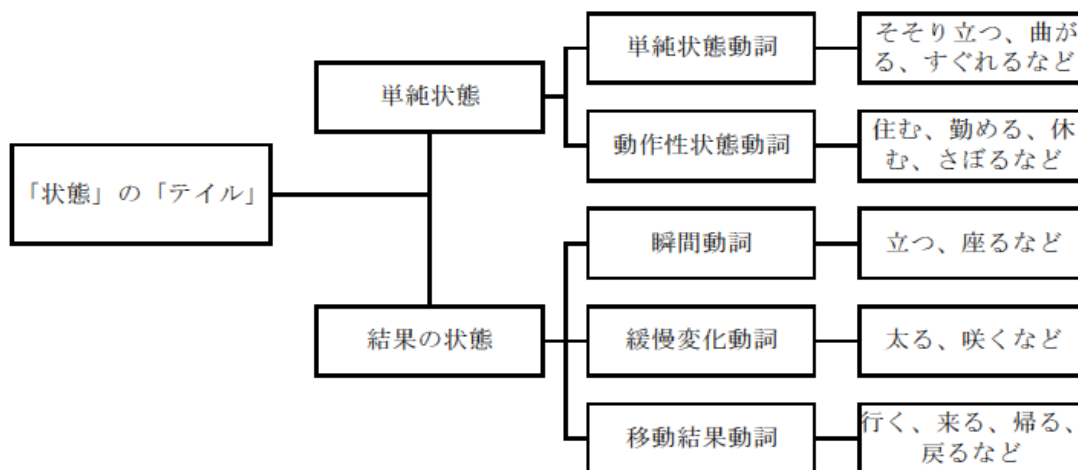


次に、「単純状態」の用法について分析した。その結果、「単純状態」を表すのは、従来言われてきた「曲がっている」、「すぐれている」などの形容詞的状态を表す動詞以外に、「住んでいる」、「休んでいる」、などの動詞もあることがわかった。これらの動詞に共通していることは、多様な動作によって構成されており、具体的な動作が感じられなかったり、或いは何もしないという意味で、全く動作性が感じられないという特徴を持っていることがわかった。このような動詞を「動作性状態動詞」と名付けた。これらの結論をまとめ、以下の図に示した。



次に、「結果の状態」について分析を行った。その結果、従来言われた「瞬間動詞」以外に、二種類の性質の異なる動詞も「テイル」を付けると、「結果の状態」を表すことがわかった。その一つは「咲いている」、「痩せている」のような動詞であるが、これらの動詞の存在が従来の研究では、気づかれてはいたが、「瞬間動詞」の一種として分類されたりした。しかし、「咲く」や「痩せる」などは決して瞬間的な変化ではなく、むしろ逆に非常に変化が緩慢で、長時間にわたるため、その変化の途中を観察することが不可能である。この種の動詞を「瞬間動詞」と区別するために、「緩慢変化動詞」と名付けた。また、もう一種は、移動を表す「行く」、「来る」などのような動詞であり、これらは「テイル」を伴って到着後の状態を表していることが分かった。今回は動詞一覧表を用い、他の移動動詞についても分析し、「行く」、「来る」、「帰る」、「戻る」は他の移動動詞とは全く異なる性質を持つことがわかった。さらに、これら进行分析した結果、移動にある一定の時間を要するにもかかわらず、移動の途中は表さず、その結果のみを表すという特殊な性質をもつことがわかった。そのため、これらを「移動結果動詞」と名付けることにした。その結果から、「状態」

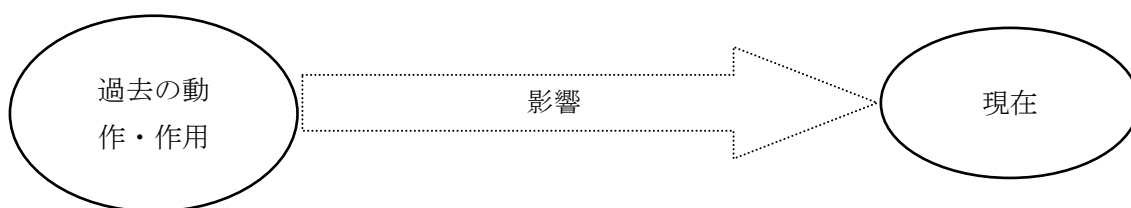
を表す「テイル」を大きく、二種類に分け、それらに属する動詞を分類し、以下の図式を得た。



第5章 「テイル」構文の新たな第5の用法——立証のための情報提示

ここでは、従来問題にされてきた、いわゆる「経験」の用法について論じた。この「経験」という名称は藤井正（1966）が名付けたものである。その後、「記録」、「過去の事実の回想」、「現在有効な過去の運動の実現」、「パーフェクト性」、「効力持続」などの諸説が現れた。これらの中から、藤井正、高橋太郎、吉川武時また、工藤真由美、庵功雄、江田すみれの説を分析し、その主張を以下の図式にまとめた。

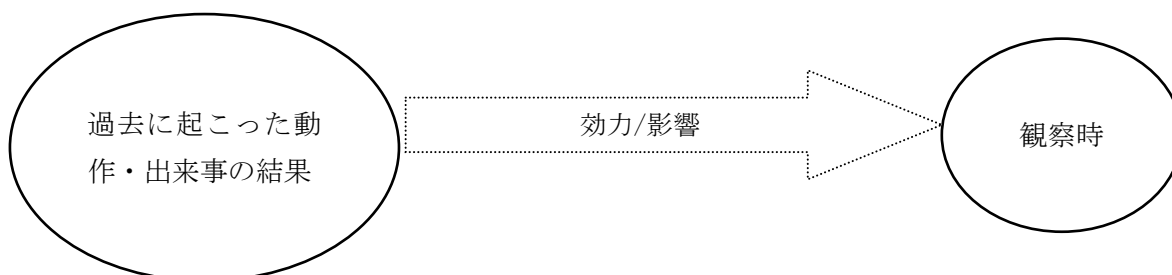
藤井正、高橋太郎、吉川武時など



工藤真由美



庵功雄、江田すみれなど



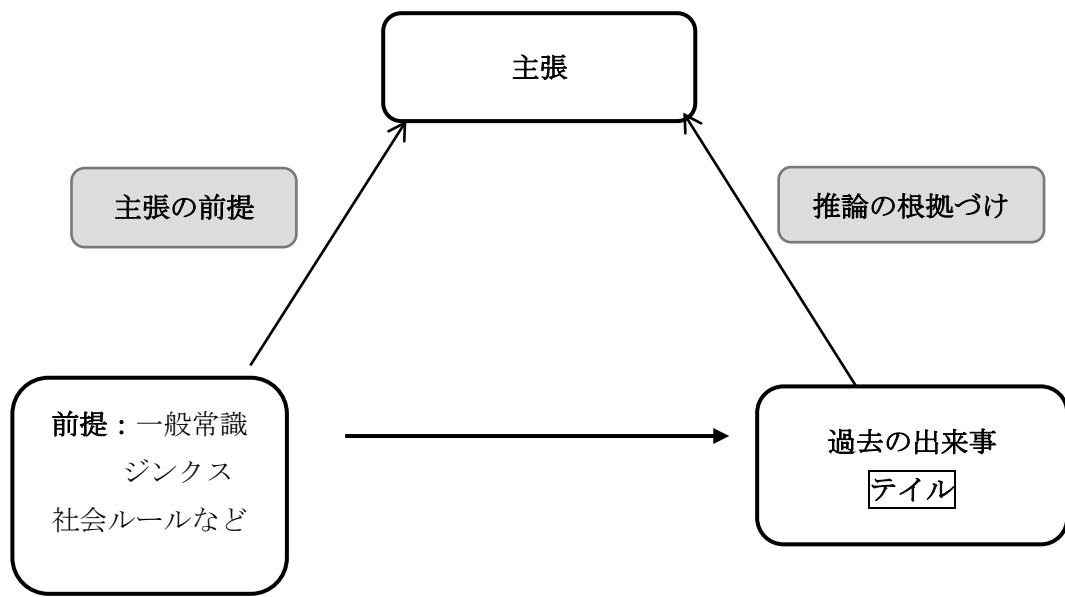
従来の先行研究では、「テイル」構文を使う理由として、過去の出来事自体が「影響」や「効力持続」という要素を持っており、そのことから現在へのつながりができていると分析されてきた。この節では、筆者は従来と異なり、短文ではなく、二つの文章を取り上げ、「テイル」構文について、談話分析の手法を用いて分析を行った。その結果、この「テイル」の用法は、過去の出来事自体は何の「影響」も「効力持続」も持っていない場合があるということを立証し、問題提起を行った。

分析の結果、この二つの文章の「テイル」は、「影響」や「効力持続」などではなく、何か「情報」のようなものを表しているのではないかと考えた。そこで、最も一般的とされる梅棹(1995)の「情報理論」に基づいて、分析を行い、「情報」とは、「行動に影響をあたえる」というようなプラグマティックな目的を含んでいるということがわかった。

この梅棹の「情報が行動に影響を与える」というプラグマティックな視点から、二つの文章の分析を行い、更に他の12個の文章例にもその結果を当てはめ、談話分析を行い、それぞれ同一の談話構造を持っていることを明らかにした。

以上の談話分析の結果、日本語では、発話者(著者)が自分の主張を立証したり、相手を説得したりするといった目的で、過去から、人為的にある出来事を持ち出し、立証の根拠とする際に、「テイル」を使うのではないかと考えた。また、これらの立証の根拠は一定の前提に基づいていることを明らかにした。これらのことから、日本語の「テイル」は過去の出来事などをある前提に基づいて、立証のための根拠づけとして、相手に示すという機能を持っているという結論を得、この機能を「立証のための情報提示」という名称をつけた。

この用法をまとめ、「立証のための情報提示」の一般的な談話構造として、次のような図式を示した。



以上が本論文の結論であり、「テイル」の全体を五つの用法に整理し、更にその下位分類を行い、全体の関係を示し、学習者の理解の一助となるようにした。